

# ろくろ由



## ろくろ由

むかし、多治見のはずれにある窯どこ、市之倉というところにろくろの名人由造という人がいた。

袋物とよばれる花びんや徳利はもちろん、平たいものでも、直径が三尺（約九十センチ）であろうが、すういと横にひきこなすし、背たけほどあるつぼなどは、だんだんと高い台の上のつてはぐいぐいと引き上げて、それはみことなものであった。

ことに、由造の早ろくろは人間わざとは思えないほどで、手がつつとろくろに盛られている土にあてがわれると、土はそのままつうつと上がってはちよんと切られ、皿であろうが茶わんであろうが、二十や三十はあつという間に作られた。しかも、そのどれをとつても、寸法、形が少しもちがわず、まったくかたんにちよいちよいと干し板の上にならべられるのだった。

それは土から茶わんをひくというより、土がいつのまにか茶わんになっていたといったほうがいようなみことな早さで、わざわざ由造のそのわざを見にくる人もあるくらいだった。人びとは、こんな由造を「ろくろ由」とよんであがめた。

ところが、ある日由造は同じ窯場の職人からどきつとする話をきかされたのである。

多治見から五里（二十キロ）ほどはなれた瀬戸の窯場に「きつつきの義太郎」というろくろの

名人がいて、この人のろくろはおそらく由造をうわまわるであろうというのである。

「会わねばならん。」

由造はすぐさまそう思った。

あすまでが待てず、由造は馬車引きの源さにたのんで瀬戸まで乗せていってもらうことにした。下半田川をこえ、ひんやりとこつべたい蛇が洞峠へさしかかると、低くつらなっている山なみのホオの木のはっぱがいつせいに裏返って、表がわの緑をまったく見せず白銀色にかがやいてるのがみごとだった。

「ホオバが裏返つとる。雨になるのう。」

源さのことはもきこえないほど由造は気がせていた。

「源さ、『きつつきの義太郎』という人のうわさを聞いたことがあるか。」

峠の茶屋で由造は馬方盛りといわれる、あのごべつときようさん盛られている大きな石皿から、イモの煮つけをとりながら聞かずにはおれなかった。

「なんや、知らなんだのか。」

由造はむねがどきどきしてきた。

「早う、馬車動かいてくれや。」

源さはゆっくりしお茶をのみながら、うでくらべする気じやなとかんづいて、

「瀬戸くんだりになげんさるなよ。」

とはげました。そして、瀬戸へ着くと、

「このむろよ。」

とあごをしゃくって由造を降ろした。

うす暗いむろの奥の方にろくろ座があり、そこにしらがまじりの男がろくろをひいている。

「ごめんください。『きつつきの義太郎』さんとやらにお会いしたいのですが……。」

「わしですがの。」

男は指の土をしごき取りながらこたえた。

「わしは市之倉の……。」

といかけたのを

「ろくろの由造さんでしょう。」

と先をこした。

「へえ。」

「ようこそ、わしも一べん、あなたには会いたいと思つとった。」

義太郎は気持ちよくお茶をすすめたりした。

よもやま話をしばらくした後、義太郎が口をきった。

「さて、はじめましようかの。」

義太郎は、やはり由造のむねの中をちゃんと読みとっていたのである。二人はならんでいるろくにむかつてすわった。

「まず、尺五（一尺五寸の意味。直径四十五センチ）の皿でもやりましようや。」

「ええです。」

由造は、しずかにろくろを回す棒をとりあげた。義太郎もその棒を手にしたが、それがくせらしく、コツコツとろくろのへりをたたき、回わしはじめた。「きつつきの義太郎」とはよくいったものだ。

なれた手つきで二人がひき上げた皿は、さすがにどちらものびやかで、こころもち義太郎の方が厚みがあった。

だが、たがいのろくろの上を見つめ合う目には、何もかも見のがすまいといったものが光り、やがてそれは柔和なものに変わっていった。

「おみごとですなあ。」

義太郎がほめた。

「いや、あんたのはどっしりしていますなあ。」

由造も心がらはめた。と、義太郎の手がそばにあったわらひもをひきよせ、自分の皿のさしわ

たしを測り、そのままそうつと由造の皿の上に持っていった。

ピンと張ったひもの両端をつまんでいる指と指の間へ、由造の皿もピタリとはまる。

「びつたりや。一分一厘まちがいなし。」

義太郎がにっこりわらうので

「それは尺五のひもかな。」

「わしのひくのが尺五だから。」

由造はぐつとつまった。何という自信……。

由造もすかさず言った。

「わしのに合わせてもらってもよかった。」

義太郎はそれにうなずいただけであったがほんのいっしゅん「こいつ」と目をするどくしたのを由造はすばやく見てとった。

「さあて、つきは早ひきでもやりますかな。こんどは由造さんの方からいってくださいませんか。」

「そややのう。五寸（直径約十五センチ）小鉢二十というのはどうやろう。」

「けっこう。」

二人はろくろに目をそそいだままの姿勢で大きく息をすいこんだ。

「はい。」

由造のかけ声で、するすると二つのろくろがまいだした。

ろくろに盛られた土の山から、おもしろいようにすすいと小鉢がとびだしてくるようである。

「はいっ。」

終わりを上げるみじかいこのことばが二人の口から出たのは、それこそまったく同時だった。

「ははは……。いっしょじゃったね。」

二人はわらい合ったが、その目はさつきよりするどくたがいの作品の上にそそがれていた。義太郎は、由造の作った小鉢の腰のふくらみのよさに舌をまいた。

もちろん、びしやりと同寸同形をしていることはまちがいない。

由造は義太郎の小鉢の口元が、何とも言えぬかすかなそりを見せているのに目をみはった。あの早さでこの芸当……。

「やあ、どうも感心しますなあ。」

「おそれいました。」

二人は思わず、どろのついた手をしっかりとにぎり合った。

「これからもわたしとおつきあいしてもらえるかの。」

と義太郎がきけば、

「市之倉へも来てくださらんか、ぜひ。」

と由造も目をかがやかせた。

話はずんでいるうちにひるどきとなり、由造が持つて来たにぎり飯を出そうとすると、義太郎は押しとめて、しぐれとのりをかけた茶づけをすすめ、自分もさらさらとかきこんだ。やはり気を張っていた後だけに、ほどよいしおかげんの汁がうまかった。

茶づけを盛った茶わんは黄瀬戸の夏茶わんである。

お茶づけには少し平たすぎるそれを、由造はこぼさぬように心して口へもってゆく。

そのうち、三くち、四くち、さらさらとかきこんでいた由造のはしの動きがにぶり、やがて止まってしまった。

由造はその茶わんのみごときにあつとうされたのである。

今、両の手でささえている茶わんの底を裏返してみるのがおそろしいほどのしょうげきを受けていた。由造はそろそろとその茶わんを目の高さに上げて言った。

「義太郎さん、わたしの負けです。わたしにはこんなすごいのはできません。」

のどからしぼり出すような声に、義太郎はやぶれるようなわらい声をあげた。

「あつは、は、は。それがわしの作じやと。由造さん、あんたろくろの腕だけやなしに、ものを見る目もたしかじやのう。」

「あんたのやないですか。」

由造はほっとため息をついた。

「とんでもない。こんなのができたら日本じゅうが目をむくじやろうて。これはの、天下の溪山大先生のお作じや。わたしはこれをここの大將から見せてもらった時から、どうしても欲しゅうなって、とうとう、この茶わんもらえなんだからよその仕事場へ行くといつての、まきあげちまったいわくつきの宝ですわい。」

「ほう……。」

由造はこの茶わんを見られただけでもほんとうに瀬戸へ来てよかった。いや、こんなすごいものに出くわせるなどとはゆめにも思っていなかったと、いつまでも、いつまでもその茶わんをなでさすっていた。

由造は上きげんで市之倉へ帰ると義太郎がくれたみやげのつつみを聞いてみた。

「あっ。」

とうもろこしや、とりたてのなすびの中にあの茶わんが、紙にくるんでむぞうさに入れてあったのである。

安藤 俊子

# どんぼり池の話

〈第一話〉



